



ノアの爽^{かぜ}風



～目次～

- 病院短信『認知症の専門病院として（その3）』
瓦井 洋
- 看護日誌
- 作業療法室だより
- 日常の一コマ

3月の予定



◆誕生日会&ひな祭り

1病棟: 13日 (金) 14:00~	} 各病棟にて
2病棟: 12日 (木) 14:00~	
3病棟: 11日 (水) 14:00~	

誕生日会(節分)



2025年2月3日 節分!! 今年も
セントノアに鬼がやってきましたぐへ'>

鬼は~外~(w)ノ
福は~内~(*'▽')



ケーキバイキング



良い笑顔ですね(#^_^#)

みなさん、おいしそうに召し
上がっています(*'▽'*)



『認知症の専門病院として(その3)』

何処の病院からも「邪魔者扱い」をされ、施設からも「追い出され」、最後の砦である家庭内ですら「家庭崩壊の危機」に見舞われる。それこそ「三界に家無し」状態になっているこの国の認知症の患者さんたち…。当時の病院業界は、そんな患者たちに手を差し伸べる事はしませんでした。唯一、精神科病院のみが一時的に入院を認めていたところもあったようですが、認知症患者と精神科の患者は医学的に見ても別物です。それに単なる噂だとは思いますが、精神科病院では医者や看護師の言う事を聞かないと直ぐに身体を拘束してしまうそうです。もしそれが事実ならば、認知症患者の人権はどこにあるのでしょうか。

そんな病院業界が手を拱いているうちに認知症患者は目に見えて増え続け、当然のように認知症患者さんの行方不明や、危険な行動が頻りに報道されるようになりました。私のモヤモヤは増え続けていき、いつそのこと自分のこの手で『認知症の専門病院』を創ってやろうか、そんな大それた気になって準備を始めたのが今から25年前でした。そしてその病院の内容は、患者さんの『入院期間を設けず』『看護介護を通じてゆったりと穏やかな入院生活を送って』もらい、『最後の刻までその人らしく(人間らしく)入院生活を過ごさせて』やりたい。そう、まるでホスピスに準じたような認知症の病院なのですが、そんな病院が今の世の中には必要ではないのか、と本気で思ったのです。私も以前に埼玉県と神奈川県にホスピスを2つ創った経験があるのですが、ホスピスの患者も認知症の患者も、どちらも現代医学では治せない病気です。だからと言って今更ホスピスと認知症の病院を比べるつもりは毛頭ありませんが、でも、せめて私が創りたいと思った認知症の病院では、院内だけでも自由にさせてあげたい。医療が出来な

い、看護や介護がやりにくいと言って『身体拘束をする』なんて絶対に許さない。そんな病院を創りたい…。

しかし病院の新規開設となればそんなに簡単にはいきません。しかもその頃の日本では、埼玉県はもちろんのこと全国でも認知症専門の病院なんて、まだ1つもなかったのですから…。それから2年半後、川越に出来上がったセントノア病院は私が思っていた以上に入院予約が殺到し、1年も経たないうちに168床のベッドが満床になってしまいました。そんな状況に調子に乗ったわけでもないのですが、その3年後に同じ埼玉県の春日部市に春日部セントノア病院を創りました。もちろんこちらの病院もあつという間に満床となりました。しかし患者さんは来てくれたものの、実を言いますとこの2つの病院の運営はとても大変でした。何しろこの2つの病院のスタッフ達は、殆ど全員が認知症患者の医療や看護、介護は初めての経験でしたし、全てが手探り状態と言っても過言ではなかったのです。何とか全員で頑張るしかない…。そんな大変な思いをした一方で、ほんの少しだけですが、この世の中に貢献できる病院を創ることが出来たかな、と多少の満足感がありましたけど。

それから20年。2つの病院はまだ十分とは言えませんが、この川越・春日部のセントノア病院が背負った役目は、多分今後も続くと思っています。日本を含めこの世界の医学がもう少し力を付けて、30年後か40年後かは分かりませんが、認知症を治す薬が出てくるまではこの役目は続くだろうと思っています。その役目が終わるまでは、我々の病院は『身体拘束はしない』『延命を目的とした治療は行わない』『医療による寝たきりは作らない』『最後の刻までその人らしく』の4つの病院理念のもとに、職員が一丸となって頑張らなければなりません。それでこそ、医療従事者としての責任であり、誇りでもあるのですから。(終り)



日常のーコマ

今月は1病棟の京子さん(94歳)です。京さんは宮城県出身で、5人兄弟の1番目で生まれました。女学校卒業後、25歳で小学校の先生をしていたご主人とお見合い結婚され、4人のお子様に恵まれました。若い頃から登山が趣味で友人たちと色々な山に行ったり、家族でピクニックに行ったりしたそうです。他にも和裁が得意で、娘さんの七五三の衣装や綿入りの半纏を作ってくれたそうです。その半纏を着て受験勉強をしていたと次女さんがお話ししてくれました。ご主人の定年後はご夫婦で近場の山へ登山に行ったりと趣味を楽しんでおられました。87歳頃からすくみ足(足が前に出にくくなる)の症状が出始め、88歳の時にパーキンソン病とレビー小体型認知症の診断を受けました。90歳の時にエスカレーターから転落し2か月程入院治療を受けましたが、この頃から認知症が進行し、会話がかみ合わない、また雑巾をグリルに入れてしまうなどがあり、



デイサービスの利用を開始しましたが、拒否も多く休みがちでした。91歳の時に在宅生活困難となり、他院を経て令和5年9月に当院に入院されました。入院後はとても穏やかで、こちらからの呼びかけにも「はい」と返事を返してくれます。また、気分の良い時は「ありがとう」と言ってくれ、昔のことを話してくれる時もあります。その一方、たまに眠れない時もありますが、その時はお茶を飲んでもらったり、話をすることでリラックスしてくれます。食事は食事の形態がミキサー粥や高カロリー食品に変わっていますが、入院当初も今も全量召し上がっています。これからも穏やかな生活を送れるよう、ケアしていきたいと思えます。

作業療法室だより



木々が色づき始め、セントノアの庭も春を感じるこのごろです。私事ですが入職してから様々なプログラムに携わせていただいているので、今回は改めて川越セントノアで取り組んでいる活動やイベントについて順に紹介させていただきたいと思えます!

記念すべき第1回活動紹介は…“映画”です!

患者様の「懐かしい映画が見たい」「この俳優が好きなの」「よく映画館に行っていた」という声から、祝日は映画の日を開催しております!

先日は第4弾となる「東京のバスガール」を鑑賞しました。



皆様集中して御覧になり、「よかったわ」「懐かしい」「発車オーライ!ってね」など様々なコメントを頂きました。中には涙を流しながら鑑賞される患者様やスタッフも…これからも患者様とともに楽しみながら取り組んで参ります!

第2回活動紹介は毎日行っている“〇〇”です!お楽しみに!



看護日誌



2月は立春を迎え、暦の上では春の始まりですが寒さが最も厳しい季節でもあります。節分の豆まきやバレンタインデーなど心が温まる行事がある一方、空気が乾燥し体調を崩しやすい季節です。特にインフルエンザは流行のピークを迎えます。予防には手洗い・うがい・マスクの着用・十分な睡眠と栄養・適切な加湿が大切です。3月に入りますが、これからも私自身体調管理に注意しながら、安心して療養できる環境づくりに努めていきたいと思えます。